

アイヌ口承文芸テキスト集2

白沢ナベ口述 主人を助けられなかった犬

採録・訳・註 中川裕

解説

今回紹介するアイヌ口承文芸のテキストは、1993年6月1日、千歳市蘭越の故白沢ナベ氏の御自宅において、筆者が氏から録音した uepeker であり（整理番号：N9306011.UP）、2000年度千葉大学文学部日本文化学科の「アイヌ語学演習」という私の授業で教材として使ったものである。なお、語り手の白沢氏については、『ユーラシア言語文化論集』3号（2000）のアイヌ口承文芸テキスト集1「狼から逃れた娘」を参照していただきたい。

この uepeker は、一般のいわゆる「人間の散文説話」と比較して、かなり特異な構成になっている。そのひとつは、途中までは通常の「人間の散文説話」と同じく人間が叙述者として話が展開して行くのだが、途中でその人物が死んでしまい、その飼い犬（オオカミ）の自叙となっていくという点である。散文説話の中にカムイを主な叙述者とする「カムイの散文説話」（kamuy uepeker 等々）というジャンルもあることはよく知られていることであり、話の途中で叙述者が交替するというのも珍しい形式ではない。しかし、人間からカムイへ叙述者が交替し、あまつさえそれで話が終了してしまうというのは、筆者の見ている範囲でもかなり特殊なものである。

それに近いものとして、同じく白沢氏口述の「カッコウの妻になった娘」と筆者が題した話（『オイナ（神々の物語）3』北海道教育委員会、1994、所収：整理番号 N8710301.KY）があるが、これは人間の男性の叙述から話が始まり、その娘を助けたカッコウのカムイへと叙述者が移り、さらにそのカムイに育てられた人間の女へと叙述者が代わって終わるという珍しい構成になっている。ただし、この話は白沢氏によって神謡として語られている話であり、各地で記録されているその類話も神謡として語られているものである。なおかつ他地方の伝承ではその最後の人間の女の自叙部分しかなく、人間の自叙でありながら神謡という形式をとっているという点で、神謡の中でも特殊なものである。

くわえて、本稿で紹介する uepeker において特異だと思われる点は、後半の叙述者である犬が、主人の死を嘆いていわば自殺するような形で話がお終いになるという点である。散文説話では多く

の場合、物語の中で起きた事件が何らかの形で無事に解決されて、ハッピーエンドに終わり、最後は叙述者である人間が、「今はすでに自分も年老いたので、このことを話しておくのだ」などの表現で以て、自分の子孫に自分の体験談を語り残すという形をとる。ところが、この話は誰かに語り残すという形式をとることもなく、しかも、物語中で起きた事件について、叙述者である犬はなんら解決の手段をとることができず、何の救いもない形で話が終わる。

この、カムイが叙述者になるという点と、通常の散文説話とは違う終わり方をするという点は、偶然そうなっているのではなく、何らかの密接な関係があると思われる。つまり、主人公（人間）の不幸な突然の死で話が終わり、そのままでは通常の人間の散文説話の枠組みでは表現し切れないために、叙述者を人間からカムイに切り替えたということも考えられるし、あるいはこの話はもとも後半部分だけで神話として語られていたものであるのが、後に散文で語られるようになってから前半部が付け加わり、散文説話の体裁を備えるようになったということも考えられる。

こういった点からして、旧来の散文説話と神話というジャンル区分の中にうまく入り切らない話の一例が、ここに見られるとあってよいのではなかろうか。また、こうした問題はカムイの散文説話というジャンルの存在を考えると、散文説話内のジャンル区分の問題にも話が及ぶが、このカムイの散文説話については、実は議論そのものがこれまでほとんどなされたことがなく、ただ単に神話からメロディと折り返しの句 (sakehe) が無くなったもののように、漠然と考えられているだけである。さらにいえば散文説話 (uepeker, tuytak . . .) というものと、散文で語る (rupaye, irupaye) ということの違いについても、十分な議論はまだなされていないのであり、さらに具体的なデータをつきあわせての検討が必要であると考えられる。

そういった問題とは別に、この物語には興味深い点がさらにいくつかある。その一番大きなものは、この話の中心的存在である後半の叙述者が、犬なのかオオカミなのかという問題である。このカムイは、最初人間の父親から pinne seta 「雄犬」あるいは a=kor seta 「私の犬」と呼ばれているが、それが殺されてカムイへ叙述に切り替わるところでは、horkew seta 「オオカミ犬」と呼ばれている（これは叙述者のせりふではないので、語り手の表現ということになる）。そして、最後にカムイである叙述者が話をしめくくるところでは、horkew a=ne ruwe ne a kusu, a=eysoytak hawene na. 「私はオオカミであったので、その話をしたのだ」となり、それを受けて語り手のせりふとして、sekor kane horkew kamuy isoytak 「と、オオカミのカムイが語ったのだ」という表現になっている。

つまり、たまたまそのように表現されているだけかもしれないが、すくなくともこのヴァージョ

ンにおいては、話の前半部で犬として語られているものが、その犬自身の叙述に移ると、オオカミとして話が展開して行くことになっているのである。この途中に出てくる horkew seta という表現について、白沢氏は、「もとは horkew. horkew の迷い子でもあずかったんでないの？ と、思うんだ」と説明している。つまり、オオカミの子供を犬として育てたので、わざわざ horkew seta という言い方をしているのではないかというわけである。

犬とオオカミの関係については、更科源蔵氏が、セタウシナイなどの地名のセタについて、狼のことをセタと呼んでいる例が少なくないと論じているところで、「これは昔、狼と犬とを同じに考えていたからのようで、狼を飼っていて山狩りに連れて行き、鹿を獲らせた（釧路白糠）とか、春の発情期になると狩りに連れて行った犬に狼がうるさくつきまとうものだ（旭川近文）とか、自分は飼ったことはないが、先祖が狼と犬が交尾してできた仔を飼っていて、よく猟をしたという（釧路雪裡）などという話を聞いたことがある」（更科源蔵・更科光『コタン生物記』Ⅱ、1976、法政大学出版社、p.291）と記している。

ここで挙げられている例は、狼を犬と同じように飼って猟に使ったということと、狼と犬が交配可能である（と考えられていた）ということだけで、狼と犬を同一視していたという例証にはならない。しかし、狼が人間の世話をさせるために自分の子供を人間につかわし、それが人間によって犬として飼われているという話は少なくなく、狼の子供を犬と同じように扱うということが、現実の生活の中でも、物語の中でもある程度確立していたということが言えそうである。

もうひとつ興味深いのは、主人公の犬がいわば「自殺」を遂げるという点である。そう数多くはないが、アイヌの伝承文学中にも「自殺」に類することが描かれるものがある。しかし、カムイの自殺を描いたものは非常に珍しい。それが犬という、アイヌの伝統的生活の中における唯一の家畜、つまり人間に一番近いところにいる動物だからこそ、そのような展開が可能だったのだろうか？ それとも、他のカムイについてもその自殺について語られた物語があるのだろうか？

また、筆者は最初このテキストの表題を「主人の後を追った犬」とするつもりだった。しかし、よく考えてみると、主人の後を追って行ったのだとは言い難い。この犬の魂が、人間の主人の魂の行く先であるはずの sinrit「先祖の国」に行ったとはどこにも述べられていないし、むしろこの犬は、自分が守るべく遣わされた人間を殺されてしまっただけで責任を感じ、自暴自棄になって命を落としてしまったのであって、死んであの世にいる飼い主の元へ行こうという意識があった様子はないからである。したがって、その魂はどこへ行ってしまったものやかわからない。

一方、人間の行くあの世の世界にも犬がいて、迷いこんだこの世の人間を見つけて吠えかかると

いう話は、よく聞かれるもののひとつである。その犬たちはどこから来たのか？ 言い換えると、犬が死んだらその魂はどこへ行くと考えられていたのか？ 血のつながった親である(?)オオカミの元へか？ 飼い主である人間の元へか？ このような変則的な死を遂げた場合は、どこにも行けずにこの世をさまようのか？ これはアイヌの世界観に関わる興味深い問題であり、本稿はそこにひとつの面白い素材を提供するものと言える。

テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、= (イコール) は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。_ (アンダーライン) を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、an w_a → an ma. h_i や y_ak のような例では、h や y が脱落することを示す。また、<wa>のように<>でくくったものは、白沢氏の語り癖で次の語句を考えるときなどに直前の語の最終音節等を繰り返すことがよくあるが、その音を示すものである。

原文テキストとその訳は、段落ごとに対応するように左右に並べて提示した。註は各ページごとに脚註の形で示した。脚註中、(N9306011.FN) 等と書かれたものは、その文章が含まれるデータファイルの資料整理番号を表す。FN、KY、YR は、それぞれフィールドノート、神話、英雄叙事詩であることを示す。

本文

kotankorkur a=ne wa pinne seta sinep
a=kor wa nepenepo arikiki wa sirki ya ka
a=eramuskari. ekimne a=tura kor orowano
i=etok ehoyupu wa omanan wa, neun pakno
rupne kamuy ne yakka okkewe kekke¹ wa
i=etok² o. yuk ne yakka ronnu wa ari wa
i=etok o wa, orowa a=koonkami a a=koonkami
a wa orowa, a=se ranke kor an=an pe ne a
korka,

hankeno ekimne=an usi ta tane kamuy ka
yuk ka a=okere noyne ne wa kusu,
kucakar=an w_a oro ta an=an hi ne a korka,
orowa kimun kuca ka a=kar hine, toop kim ta
ka kuca a=kar wa ... kuca a=kor wa an=an
ruwe ene an h_i ne wa, nepenepo a=kor seta
i=sinkire ka somo ki no³ kamuy ka ronnu yuk
ka ronnu. nep ne yakka ronnu wa, a=se wa
a=rura hi a=ekasuy⁴ sekor patek yaynu=an kor
an=an pe ne a p,

私は村長であり、雄犬を一匹飼っていたが、(その犬は)なんとまあ働き者であることかわからないほどである。山へ連れて行くと、私の前を走って行ったり来たりして、どれほど大きなクマでも首をへし折って私の前に置き、シカも捕って私の前に置いて、その度に私は何度も礼拝をしては、(その肉を)背負っていたものだったが、

近くの山猟をする場所では、もはやクマもシカも捕りつくしてしまったので、狩り小屋を建ててそこにいたのだが、山手の方にも狩り小屋を作っており、ずっと奥山の方にも私は狩り小屋を持っていた。私の犬は、私に手間ひまをかけさせることもなく、クマも捕り、シカも捕り、何でも取ってくれるので、私は(肉を)背負って運ぶのを手伝いに来ただけだなあとばかり思いながらいたが、

¹ 白沢氏はこの部分について、「okkewe kekke っていうけども、sewrihi やぶくから殺せるんだべさと思うんだ。okkewe kekke って、どうやってこうやって折る。わけもないことだなと考えるの」(N9306011.FN)と、語っている。sewrihi とは「のど」のこと。つまり、首の骨を折るといっているが、実際にはのどをくいやぶって倒すはずだということである。いかにもリアリストの氏らしい発言である。

² kotca が「静止しているものの前」を表すのに対し、etok は、「移動しているものの前」を表す。したがって、i=etok o 「私の前に置いた」というのは、私が待っている所に犬が獲物をくわえて持って来たということではなく、私が犬の後から行くと、その先に倒したクマだのシカだのが転がしてあるということであることが、この位置名詞の使い方ひとつで表現されているのである。

³ i=sinkire ka somo ki no : 「私を疲れさせもしないで」。私が直接手をくださなくても、全部狩りをやってくれてということ。

⁴ a=ekasuy : e- 「(肉を背負って運ぶこと) について」 kasuy 「(犬) を手伝う」。

sineanta ekimne=an kusu arpa=an hine,
<ne> inawke=an⁵. cise onnay ka kuca onnay
a=kerkeri. munihi a=nuwenuwe a=kerkeri wa
soy a=o. orowa inawkar=an w_a ekimne re
hot, episne re hot, inaw a=roski ruwe ene an
h_i ne hine orowa, suke=an wa ipe=an⁶ wa
hotke=an ruwe ne hine, isimne hopuni=an
w_a inkar=an akusu, a=roski rok inaw opitta
kuca hekota horak wa oka ruwe ne.

"nenno siran kor anakne, somo ekimne=an
pe ne."

sekor hawas h_i a=nu kor sukup pe a=ne
kusu, a=eyaykouepeker_ ruwe ne korka,

"tan te pakno <no> e=ek wa orowa
arikinne⁷."

sekor yaynu=an kusu, orowa,

"kimun kuca or pak e=arpa wa inkar y_ak
pirka."

sekor yaynu=an pe ne kusu, <su> kimun
kuca or un suy a=kor seta a=tura hine
arpa=an ... ohonno ekimne=an ka somo ki p ne
kusu, kuca onnay ka mun patek ne.

ある日、狩りをしに山へ行って、イナウを削った。家の中も、狩り小屋の中を掃除して、ごみを掃き掃き、(たまったごみを) かき取って、外に出した。それからイナウを作って、山の方に向かって60本、浜の方に向かってイナウを60本立てて、それから料理を作って食べて寝た。翌日起きてみると、立ててあったイナウが全部、狩り小屋の方に向かって倒れていたのだった。

「そういう風になった時は、狩りに行くものではない」

ということを知って育ってきたものだから、私は考えこんだが、

「せつかくここまで来たんだから、思いきって」

と思ったので、そこで

「山手の狩り小屋まで行って見よう」

と思ったので、山手の狩り小屋へ再び私の犬を連れてでかけて行った。長いこと(そこまで)狩りに来ていなかったの、小屋の中はごみだらけであった。

⁵ inawke : これはちょっと早く言い過ぎたので、家を掃除したことを語ってから、もう一度言い直している。

⁶ suke=an wa ipe=an : これは白沢氏に限らず散文説話の語り方一般に共通したことであるが、ストーリー展開と直接何の関係を持たない場合でも、何かイベントのつなぎ目、例えば朝起きた時とか、夜寝る前等の場面では、必ずといってよいほど料理を作って食事をする場面が挿入される。

⁷ arikinne の後には、何か動詞句が来るはずであるが、省略されている。

usa niham ahup w_a rera parparu p ne
kusu, ahup w_a cise onnay cipatupatu⁸ wa
siran w_a kusu, irammakaka kuca onnay
a=kerkeri hine a=osura hine orowa suy,
episne re hot ekimne re hot kamuy ... inaw
a=kar wa inawcipa or_ ta a=kor wa arpa=an
hine a=roski ruwe ene an h_i ne.

"ekimne=an kusu ek=an ruwe ne kusu, kim
erok kamuy ne yakka inaw a=korpare siri ne⁹
kusu, i=epunkine wa i=kore yan."

sekor itak=an kor, inawroski=an. episne ne
yakka, pisun kamuy utar_ ne yakka
a=inawepiste¹⁰ hine orowa, suke=an w_a
ipe=an. sironuman w_a kusu, suke=an w_a
ipe=an ruwe ene an h_i ne. a=kor seta ka
kironnu no a=ipere hine orowa, hotke=an
ruwe ene an h_i ne wa,

isimne hopuni=an w_a inkar=an akusu,
kim ta kimun kuca or_ ta a=roski rok inaw ka
opitta cise hekota horak wa oka ruwe ene an
h_i ne wa, wen iyokunure toy iyokunure a=ki.

木の葉などが入って、風が吹き込むの
で、(木の葉が) 入って、家の中で舞い
飛んでいるので、きれいに小屋の中を掃
除して、(ごみを) 捨てて、それからま
た浜の方へ60本、山の方へ60本、イ
ナウを作って、弊柵へ持って行って、立
てた。

「狩りをするために来たのだから、山に
いらっしゃる神々にも、イナウを差し上
げますので、どうぞ私をお守り下さい」

と言いながら、イナウを立てた。浜の
方へも、浜手の神々にもイナウをずらっ
と立てて、食事を作って食べた。夕方
になったので、食事を作って食べ、私の
犬にも腹一杯食べさせて、それから横に
なって、

翌日、起きて見てみると、山奥の狩り
小屋に立てたイナウも、ひとつ残らず、
家に向かって倒れていて、私はとても驚
いた。

⁸ cipatupatu : ci- 「自ら」 patu 「～を飛び散らせる」

⁹ siri ne : この文末表現は、このように自分が今現在やっていることを説明する際に用いられる。

¹⁰ a=inawepiste : piste には「足りない部分を埋めて、完全なものにする」というような意味があるようである。白沢氏の神謡には kemaha ka tekehe ka upiste rusuy kusu 「(折られた) 足も手ももとどおりにしたいので」(N9305232.KY) とか、 askepet pone ka hayta wa kusu, kaykuma a=kekke hine a=episte hine 「指の骨が足りないので、木の枝を折ってそれで代わりにして(5本の指を揃えた)」

(N8910291.KY) というような表現が出てくる。したがって、この場合もすべての kamuy に対して inaw を揃えて、nusa を完全なものにするといった意味があるのであろう。

"tane pakno an=an w_a, iwor or peka ka omanan=an w_a ekimne=an pe ne a korka, <ka> inaw a=roski inaw horak ka somo ki no oka wa, ekimne=an pe ne a p, makanak ne wa ene siran h_i an?"

sekor yaynu=an ruwe ene an h_i ne. a=kor pinne seta ka, sapa un kuni osor un kuni yaykoseske¹¹ ukokarkarse wa etuhu ka nuyna wa an ruwe ene an h_i ne wa, <wa>

wakka ... pon pet nupuri¹² corpok wa san pon pet eun wakkaku=an pe ne kusu,

"pon .. pon pet petokusne pet ... pet tan pa¹³ wa omanan=an yayomananka=an w_a iruka inkar=an wa, orowa hosipi=an."

sekor yaynu=an kusu, orowa, a=kor pinne ka hemuymuye¹⁴ wa etuhu nuyna wa an ruwe ne korka, a=mososo ka somo ki no arpa=an. pet turasi, pon pet turasi arpa=an ora,

「今まで、狩り場を歩き回って狩りを続けてきたが、立てたイナウが倒れてしまうなんてことは起こらずに、狩りをしてきたのに、これはいったいどういうことなんだろう？」

と、思った。私の雄犬も、頭をふさぎ、お尻をふさぐように丸くなって転がり、鼻づらも隠して、

水 ... 小川、山の下から流れ下る小川のところで（いつも）水を飲んでいたので、

「小川の向こうへ、川のこちら側から行って歩き回って、ちょっと見てから戻ろう」

と、思ったので、私の雄犬はうずくまって鼻づらを隠していたのだが、私は起こもしないで（ひとりで）行った。小川に沿って歩いて行って

¹¹ sapa un kuni osor un kuni : un は、「～にはまる」の意味。yaykoseske は yayko-「自分に対して」 seske 「～を覆う」のではなく、yay-seske が「自分を覆う」を意味し、ko-は kuni 「～するように」を受けているのだと考えられる。したがって、「頭がはまり、尻がはまるように、自分を覆った」ということになる。同様の例としては、tas kus kuni maw kus kuni yaykoseske wa oka 「息が通るように風が通るように丸くなっていた（丸くなってそれらをよけた）」(N9104061.YR) という表現がある。

¹² この nupuri の用法は、同じように「山」と訳される nupuri と kim の意味の違いをよく表すものだと言える。この主人公は現在 kim 「山」の比較的奥の方まで来ているわけだが、その先に nupuri があって、その下から水が沸き出しているわけである。つまり、kim が狩りなどをする「場所」としての山であるのに対し、nupuri が地面の隆起した「もの」を指していることを示している。

¹³ pet tan pa : pet 「川」 tan 「こちらの」 pa 「端、岸」ではないかと思われるが、いささか確信が持たない。

¹⁴ hemuymuye : 普通は人間に対して使われる言葉で、何か嫌なことがあったり、思い悩むことがあったりするときに、頭から着物をひきかぶって寝込んでしまうこと。ここでは、犬がそれと同じような格好で、頭を体にうずめて丸くなっていることを指している。

"kuske peka hosipi=an w_a inkar=an yakun
pirka."

sekor yaynu=an kor arpa=an hine, nupuri
poro nupuri corpoki wa hetuku wakka ne wa
eun a=ku kor an=an pe ne a p,

pet etok ta arpa=an w_a inkar=an akusu,
nupuri ousi wa cise par asin¹⁵ w_a an ruwe
ene an h_i ne hine, wen iyokunure toy
iyokunure¹⁶ a=ki ruwe ene an h_i ne akusu, よ
くもお前来たな sekor neno mina tek kor
soyosma. mina tek pekor iki kor soyosma wa
orowano i=kesanpa.

aynu akkari hoyupu nitan kur a=ne p ne
kusu, orowano i=kesanpa ruwe ene an h_i ne
korka, oar ... oar ... yayan kamuy ka somo ne,
a=nukar ... soyosma hi ta a=nukar h_i ta
cicikewna¹⁷ sekor a=ye kamuy iyotta wen pe
ne wa, wen kamuy ne wa <wa>, a=usitomare
kor siran pe ne a p, newaan pe ne hi a=nukar_
tek pe ne kusu,

「川向こうを通過して戻ってみるといいだ
ろう」

と思いながら行って、大きな山の下か
ら湧き出ている水であるので、そこへ(い
つも行って)飲んでいたので、

川の源に行って見てみると、山裾にク
マの巣穴が開いていて、驚きあきれてい
ると、「よくもお前来たな」とでも言う
ように、(チチケウナが)にやりと笑っ
て飛び出してきた。ニヤリと笑ったよう
な様子を見せながら飛び出してきた、私
を追い掛けてきた。

私は(並の)人間よりは足が速いので、
(すぐには捕まらず)追いかけられたの
だが、ただのクマではなかった。飛び出
してきた時に見たところでは、チチケウ
ナというクマで、一番悪いやつ、悪いク
マであって、人々に恐れられているもの
であったが、そいつであることを、ちら
りと見てとったので、

¹⁵ cise par asin : 直訳すれば「家の口が出る」。その前が nupuri ousi ta 「山裾に」ではなく、nupuri ousi wa 「山裾から」となっているのも、asin という動詞との関係であろう。

¹⁶ wen iyokunure toy iyokunure : これまで何度も来ているのだが、その時にはそんなものはなかったはずなので、驚いている。

¹⁷ cicikewna : 他の地方では cicikew, cicikewnitnehi などの呼び名で出てくることもある。白沢氏の説明では、クマのようなものだがクマよりも小さく、クマの中でも一番悪いもので、人をつかまえては食ってしまう。毛がパーマをかけたように縮れているのが特徴であり、また、体の毛色が cipor pe a=ota apekor an, cikuy pas a=kuste apekor an 「(半分が) 筋子の汁を塗りつけたかのように、(半分が) 嚙んだ消し炭の中を通したようである」とも言われるという。

orano hoyupu=an ruwe ne korka, <ka>

"a=kor pinne cucucu¹⁸. tane anakne arwen kamuy i=kesampa wa siknu kuni p a=ne ruwe ka somo ne noyne sirki na¹⁹. i=kaopas wa i=kore."

sekor itak=an kor, <kor> a=tasiroho²⁰
a=etaye hine orowano siosmak un sekor sekor²¹ a=tawkitawki kor hoyupu=an hike, wenkamuy kam sinna kane a=kamihi i=osi rispa i=kupakupa i=rispa p ne kusu, <su> a=kamihi sinna kane upas kurka cecarikar²².

orowa a=kor pinne i=kesampa wa ek wa tane anakne <ne> arwen kamuy osikoni noyne osikoni noyne sirki hi ta, arwen kamuy a=tawkino hine, i=os sirosma ruwe ene an h_i ne korka,

そこで走って逃げたのだが、

「私の雄犬よ、チュチュチュ。今、悪いグマに追いかけて、殺されてしまうかもしれないところだ。助けに来ておくれ」

と、言いながら、山刀を抜いて、後ろを、こんなふうになんかふうになんか、斬りつけ斬りつけしながら走ったところ、悪神の肉がばらばらと、私の肉が、後ろからむしられ、かみつかれ、むしられたものだから、私の肉もばらばらと、雪の上に散らばった。

それから、私の雄犬が私を追ってやってきて、悪神にもうすこしで追いつきそうになった時に、私は悪グマを切り伏せ、悪グマは私の後ろに倒れ伏したが、

¹⁸ cucucu : 犬を呼ぶ時の掛け声。萱野茂 (1977) 『炎の馬』 (すずさわ書店) 所収の、平賀さだも氏口述「犬とカワウソ」という神謡にも同様の個所があり、ここでは「ツーツツツウ」と訳されているが、原文は本稿と同じく cucucucu であろう。また、知里真志保 (1937) 「アイヌ民俗研究資料 (第二)」 (『知里真志保著作集』第2巻所収) には、Oynakamuy が犬を呼ぶ時の文句というものがあるが収録されており、その註には「cho cho は一般に犬を呼び寄せる時の呼び声である」と記されている。また、知里幸恵 (1923) 『アイヌ神謡集』所収の「瀬が自ら歌った謡」にも犬を呼ぶ声が出てくる。ただし、ローマ字では cho cho となっているが、カナ表記では「ココ・・・」となっている。

¹⁹ siknu kuni p a=ne ruwe ka somo ne noyne sirki na : 直訳すると、「生きているはずの者で私があることもないような状況だ」という表現。

²⁰ a=tasiroho : 他人に渡して他人の所有物にできるものは、一般に「誰某の何々」という所有関係を kor+概念形の形で表現する。tasiro 「山刀」のようなものも、それに入りそうなものであるが、ここでは人称接辞+所属形という、他人に渡せないものと同じ形の所有表現になっている。この点では、沙流方言の話者である木村キミ氏についても、同様に所属形で表現することを確認している。

²¹ sekor sekor : sekor は「～と (言う、思う)」という意味で用いられるのが普通であるが、このように自立的に使われると、「このように、こんなふうにと、動作を交えながら説明する時の言い方になる。

²² cecarikar : ci- 「自ら」 e- 「～<場所>に」 cari 「～をまき散らす」 -kar (他動詞形成接尾辞) = 「～<場所>に散らばる」。-kar は自動詞を他動詞化する接尾辞であるが (註 42 : niwniwsekar 参照) このように他動詞につくこともある。その場合は他動詞であることを明確にするだけであって、とる名詞句の項数を変化させるようなことはしない。

wen kamuy²³ sirosma usi ta turano
sirosma=an a=niwkes pe ka²⁴ a=hoppa wa toop
oyakke ta ray pe aynu ne sekor hawas h_i
a=nu p ne kusu, <su>

tane anakne a=siketoko ekurokkurok wa
apkas ka a=niwkes kane humas korka,
arkamuyasi ray usi ta ray=an yakun
arkamuyasi oro a=oarpa ruwe ne. sekor
hawas kor, sinrit or un arpa=an kuni a=ye ka
somo ki nankor sekor yaynu=an kusu,

orowano a=siketokoho kunne kunne
sirkunne kunne pekor inkar=an ruwe ne
korka, akkarino arpa=an wa inkar=an akusu,
poro cikisani kot tomotuye²⁵ horak wa an
ruwe ene an h_i ne hine, ne cikisani oro ta
arpa=an wa, kasi a=oosorusi²⁶ patek pirka
takar_ ne²⁷ a=ueomante ruwe ne yakun
ray=an humi ne kuni a=ramu ruwe ne kor²⁸,

悪いカムイの倒れているところで、一
緒に倒れるということはできない。そこ
を去ってずっと離れたところで死ぬのが
人間というものだと聞いていたので、

もはや、目の前が暗くなってきて、歩
くのも困難な感じだったが、化け物のそ
ばで死んだならば、化け物のところへ行
ってしまうという話だということは、先
祖のところには行けなくなってしまうの
だろうと思ったので、

そこで、目の前が黒く黒く、暗く暗く
見えるような思いをしながらも、その先
へ行ってみると、大きなハルニレの木
が、窪みを横切って倒れていた。私はそ
のハルニレのところへ行って、その上に
腰を下ろそうとしたことまでが、美しい
夢となって頭の中を行き交った。という
ことは、私は死ぬのだなと思いなが
ら・・・

²³ wen kamuy : これを、直前に出てくる arwen kamuy と同じように「悪グマ」と訳してもよいかとも思うが、ここでは「一般的に邪悪なカムイの死体のそばで」ということを言わんとしているのだと考え、一応訳し分けた。

²⁴ sirosma=an a=niwkes pe ka : この部分は、文の構造がちょっとよくわからない。とりあえず sirosma=an niwkes という文として訳しておいた。

²⁵ kot tomotuye : とりあえず、kot「窪み」tomotuye「～を横切って」と訳しておいたが、いささか腑に落ちない。本人に確かめておかなかったのが悔やまれる個所である。

²⁶ oosorusi : osor「尻」usi「～に～をつける」で十分であり、先頭の o- は不要であると思われるのだが、[awósorusi]のように発音している。ということは、a=oosorusi なのだと解釈される。osorusi であれば[aosórusi]となる。なお、この後に三人称の形で2回この語が用いられているが、どちらもはっきり[oósorusi]と発音されている。

²⁷ pirka takar ne a=ueomante : これは常套句としてよく出てくる表現であり、takar はこの場合名詞として扱われている。しかし、通常他動詞はそのままで名詞として扱われなければならないのだが、この表現では「夢を見る」という自動詞の wentarap ではなく、「～を夢に見る」という他動詞の takar の方が用いられているのは、不思議な現象である。

²⁸ ここで、ここまでの叙述者（主人公）は死んでしまう。

orowa seta ... horkew seta²⁹ isoytak hawe
ene an h_i. <ni>

neun ne wa³⁰ arikinne i=ka toy kus pekor
humas wa moymoyke ka inkar ka hepuni ka
a=nukuri³¹ wa an=an rapoki <ki>, a=onaha
aynu a=onaha pet pon pet piskan pekano
apkas wa inkar sekor yaynu kusu soyne ruwe
ne korka, hetari ka hopuni ka a=nukuri wa
i=ka toy kus. nep ka pase p i=ka a=esikte wa
moymoyke ka a=eaykap humi neno kane
humas pe ne kusu, <su> moymoyke=an ka
somo ki no an=an ruwe ene an h_i ne akusu,
<su>

hunakpaki ta "a=kor pinne cucucu. tane
anakne arwen kamuy i=kesanpa wa siknu
kuni p a=ne siri ka somo ne noyne sirki na.
hokure i=ka opas."

sekor hotuypa hawe a=onaha aynu
a=onaha hotuypa hawe a=nu wa, a=nu wa
kusu, i=ka cakkosanu hine koskosanu hine³²
orowano a=onaha kese a=anpa wa arpa=an
ruwe ene an h_i ne hine,

それから、犬・・・オオカミの犬がこ
のように語った。

どういうわけか、上からしっかりと土
がかぶさったような気がして、動くこと
も、見ることも、頭を上げることもでき
なくしているうちに、人間の父さんは、小
川の脇を通って行ってみようと考えて、
出て行ってしまったが、頭を上げること
も起き上がることもできず、上から土が
かぶさり、何か重いものが私の上に一杯
になっていて、動くこともできないよう
な感じなので、動きもしないでいたとこ
ろ、

どこからか、「私の雄犬よ、チュチュ
チュ。今、悪いクマに追いかけて、
殺されてしまいそうだ。早く助けにきて
おくれ」

という叫び声、人間の父さんの叫ぶ声
が聞こえたので、自分の上がぱっと解放
され、すっと軽くなって、そこで、父さ
んの後を追いかけて行った。

²⁹ horkew seta : 解説でも述べた通り、この horkew 「オオカミ」 seta 「犬」という表現について、白沢氏にどういう意味であるか尋ねたところ、「もとは horkew. horkew の迷い子でもあずかったんでないの？」(N9306011FN) という解答であった。

³⁰ neun ne wa : いうまでもなく、cicikewna が主人公の男を食うのを邪魔されないように、守護神である犬を妖力で押さつけていたのである。

³¹ a=nukuri : nukuri は etoranne とほぼ同じ意味で、「～する気が起きない」ということを表す。

³² i=ka cakkosanu hine koskosanu hine : cak-は cakke 「(戸などが) 開く」の語根。kos-は kosne 「軽い」の語根である。-kosanu は「瞬間的に～する」を表す接尾辞。

inkar=an akusu a=onaha kamihi sinna kane
arwen kamuy tawki wa arwen kamuy not ne
not ne³³ kamihi upas ka ta cicari³⁴ kor,
ukesanpa wa paye³⁵ ruwe³⁶ an ruwe ene an
h_i ne akusu, <su> ponno arpa=an tek kor,
arwen kamuy iniwkes³⁷ h_inne sirosma wa an
ruwe ne hine orowa, akkarino a=onaha arpa
ruwe an ruwe ene an h_i ne wa kusu,

orano ru kurkasi a ... hopuni³⁸ hine
arpa=an w_a inkar=an akusu, arwen kamuy
sirosma hi imakaketa ponno imakaketa
cikisani ruwe cikisani horak wa an.

kot tomotuye horak wa an cikisani eun
arpa ruwe an w_a, oro ta arpa=an w_a
inkar=an akusu, cikisani kasi ta cikisani ka
oosorusi anan³⁹ korka oarwen w_a <ma>
esitciw wa tane, tasu tuyno⁴⁰ wa an ruwe ene
an h_i ne.

見ると、父さんの肉がばらばらとあり、悪いクマを切り刻んで、悪グマのぶつぶつ切られた肉片を雪の上にまき散らしながら、追いかけていた跡があるので、少し先に行ってみると、悪グマが力つきて倒れていた。それから、さらにその先まで父さんが行った跡があるので、

そこで、道の上を走って行ってみると、悪グマが倒れていたところの少し奥に、太いハルニレの木が倒れていた。

その窪みを横切って倒れていたハルニレの方に行った跡があるので、行ってみると、(父さんは)ハルニレの上に行ったん座ったのだが、力つきて頭から倒れ、もはやこと切れてしまっていた。

³³ not ne not ne : not というのは、「顎」という語と同源と考えられ、「一口 (サイズの大きさ)」「ひときれ」などと訳される。

³⁴ cicari : 前出 (註 22) の cécarikar は同じような意味を表しているが他動詞であり、kurka 「～の広がりを持つ上」を場所目的語としてとっているが、cicari は自動詞なので、kata 「上に」のように格助詞を必要とすることに注意。

³⁵ ukesanpa wa paye : 後述の註 44 参照。

³⁶ ruwe : これは ru 「(足) 跡」の所属形であり、すぐ後に出てくる文末表現の ruwe とは別物である。ただし、語源的には同一のものと考えられる。

³⁷ iniwkes : niwkes は「力が足らなくて～しきれない」という意味。

³⁸ a ... hopuni : hópuni というアクセントになっているので、ho-の前に何かもう一音節あったようである。しかし、ehopuni だったとしても、「道の上で立ち上がる」となって、意味が通じない。ここでは、a=ehoyupu と言うつもりであったと解釈して、訳をつけた。

³⁹ anan : 「後から～だとわかる」という意味を表す助動詞。沙流方言の aan と同じ。この場合は、「下に倒れているのだが、状況から見て、いったん木に座ったのだと判断される」ということを表す。日本語にはしにくい助動詞である。

⁴⁰ tasu tuyno : tas, -u 「息」 tuy 「切れる」 -no (強意の接尾辞)。「すっかり息が切れる」=「全く息をしていない」。

orowano <no> kurkasike a=yayesiru wa
cis=an a cis=an a cis=an a ayne, かわいそうに
ね、cis=an a cis=an a ayne orowa hosipi=an.

"nenō e=an yakka e=onaha sinrit or un arpa
ka koyayrampew⁴¹ nankor."

sekor yaynu=an kusu, orowano
hoyupu=an w_a a=unuhu, aynu a=unuhu
a=koasurani kusu san=an ruwe ene an h_i ne
hine, a=uni ta san=an wa orowano,

a=unuhu a=niwniwsekar⁴² esoyne-
soyne=an ... soyne=an ka ki ahun=an ka ki kor
ki hikeka, oar koyayrampewtek.

"makanak ne wa sinen ne isam orowa, ene
e=iki hi?"

sekor hawean kor, hawean pe ne kusu,
orowaun cinkihi a=ekupa wa a=etaye wa
soyne=an hine ekimne a=ninpa ruwe ene an
h_i ne ayne, a=unuhu,

"makanak iki kamuy sinen ne san ruwe ne
hine orowa ene <ne> i=kimatekka pekor iki
siri ene an?"

そこで、(父の遺体の) 上に、体をこ
すりつけて、泣いて泣いて泣いたあげ
く、かわいそうにね。泣いて泣いたあげ
く、家に戻った。

「こんな風にしても、父さんは先祖
のもとへ行きようがないだろう」

と、思ったので、走って、人間の母さ
んに知らせるために山を下りて行って、
家まで下りて行った。そして、

母さんにクンクンと泣いて知らせ、
外へ出たり家の中に入ったりしたが、ち
っともわかってくれない。

「どうして、(夫が) ひとりでいなくな
ってしまって、お前はそんなことをして
いるんだい？」

と言うと... 言うので、着物の裾をく
わえて引っ張って外に出て、山の方に引
きずっていかうとしているうちに、母さ
んは

「なんだって、(犬の) 神様はひとりで
山を下りてきて、こんなふう私をせき
たてるような様子なんだろう？」

⁴¹ koyayrampew : ここでは、こう言っているように聞こえるが、koyayranpe のように言うことも多い。
後に出てくる koyayrampewtek と同じく「～をどうしていいかわからない、～を理解できない」とい
う意味だと思われるが、その省略形と見るべきかは判断しかねる。

⁴² niwniwsekar : -kar は自動詞についた場合、それを他動詞化させる接尾辞であり、peray 「釣りをす
る (自動詞)」: peraykar 「～を釣る (他動詞)」、hotuye 「叫ぶ (自動詞)」: hotuyekar 「～を呼ぶ (他
動詞)」のような例があるが、niwniwse 「クンクン鳴く」などという動詞まで他動詞化することがで
けるとするのは、大変面白い。なお、註 22 参照。

sekor hawean kor, こんど sipine hine
<ne> pikan sipine⁴³ yaykokarkar hine
orowano, i=os ek pe ne kusu a=sirepakasnu
kus hoski hoyupu=an. orowano ekimne
arpa=an ayne <ne> sanke kuca a=akkari wa
paye=an ayne, kimun kuca or_ ta paye=an
orowa, akkarino hoyupu=an pe ne kusu,

"makanak ne hine orowa, ene e=iki hi an?"

sekor hawean. a=unuhu ki kor, i=osike
i=kesanpa wa ek ruwe ene an h_i ne hine,

orowa tane anakne aynu kam ka upas ka
ta cicari. kamuyasi kam ka cicari kor
a=ukesanpa wa payere⁴⁴ okake nukar wa
orano, a=unuhu cis kor arpa ayne, kamuyasi
esitciw wa an usi ta arpa hine orowa,

akkarino a=onaha arpa ruwe kari hine arpa
hine, a=onaha samamni ka oosorusi kusu iki a
korka, niwkes wa kama esitciw wa an ruwe
nukar wa orowano, <no>

と、言いながら、身支度をして、手早
く身支度をして、私の後からついてくる
ので、私は道を教えるために、先に走っ
て行った。そして、山に行つて、里に近
い方の狩り小屋を通り越して行き、山奥
の狩り小屋に行つて、さらにそこを通り
越して走っていったので、

「どうして、そんなことするんだい？」

と、母さんは言いながら、私の後を追
つて来た。

そして、今や人間の肉も雪の上に散ら
ばり、化け物の肉も散らばつて、追いか
け合った跡を見て、母さんが涙を流しな
がら行くと、化け物が前のめりに倒れて
いる所にたどりついた。そして、

さらに先へ父さんが行つた足跡をたど
つていくと、父さんが倒木の上に座ろう
として力つき、木の向こう側に倒れてい
るのを見つけて、

⁴³ pikan sipine : pikan と nitan は「足が早い」という意味で同じように使われるが、pikan sipine のよ
うな、足以外の動作の素早さを表すような用法は、nitan にはないようである。

⁴⁴ a=ukesanpa wa payere : このようにひとまず表記したが、ukesanpa は自動詞であるので、そこに a=
という人称接辞がつくのは妙である。さらに、この文章が「追いかけ合いをさせられた」という意
味になるとすると、payere 「行かせる」の主語が何であるのかも不明である。ということは、
ukesanpa-wa-paye が全体でひとつの自動詞をなし、それに使役接尾辞の-re がついて他動詞化したも
のに、a=という不定人称の人称接辞がついたと解釈するしかない。ukesanpa wa paye という表現自体
は註 35 に示したように、本文内の同じ状況を表す場面に出て来ている。しかし、動詞の内部に wa
という接続助詞が抱合されるという現象は、アイヌ語においてはこれまで報告されていないし、一
般的に見ても考え難い現象である。このような例が他にもあるのか、今後調べてみたい。

a=unuhu pewtanke⁴⁵ kor cis a cis a ruwe ene an h_i ne korka, orowa kotan or un somo a=ye hike ene a=kar h_i ka a=erampewtek pe ne kusu, orowa a=unuhu kotan or un ye kusu san ruwe ene an h_i ne hine, kotan or un utar pikan kur patek nisuk wa orowa, usa aepi, ray kur a=mire kuni usa amip turano irura hine, inne aynu i=tura hine paye=an ruwe ene an h_i ne hine orowa,

kim ta paye=an kor orowa arwen kamuy anakne tuypatuypa wa munin ni eymekkar⁴⁶ ruwe ene an h_i ne. eymekkar pa ruwe ene an h_i ne hine orowa, a=onaha oro ta sama ta poro ape, nina pa hine poro ape ari, orano suke hine a=onaha a=koypuni ka ki ruwe ene an h_i ne hine, orowa ray kur sipine a=ekarkar hine orowa, ene hawas h_i ene an h_i. <ni>

"toop kim ta anakne <ne> sirouri=an w_a ray ... kim ta ray kur a=ukao ka eaykap pe ne kusu kasi a=ohastuye wa a=hoppa kusu ne na.⁴⁷"

母さんはベウタンケをしながら、泣き続けたが、村へ知らせないとどうしようもないので、母さんは村へ知らせに下りて行った。そして、村人のうちでも足の早い人たちばかりに頼んで、色々な食べ物や、死人に着せるための色んな着物などを運んで、大勢の人たちと一緒に、山へ向かった。そして、

山へ行くと、悪グマはぶつぶつ切り刻んで、腐れ木にくれてやり、父さんのそばに大きな火を、薪をとってきて大きな火を焚いて、料理を作って父さんに捧げて、それから、死に装束を着せかけてやって、話によると

「山奥では、穴を掘って山で死んだ人を埋めることはできないので、上に枝を切っただけで、そのまま置いて行くものだ」

⁴⁵ pewtanke : 白沢氏によると「pewtanke ってゆって、家焼けたとか、山で人クマに食われたとかっていうとき、女はウォーイっていう声出す。と、1里くらいも向うまで(聞こえる)」(N9204201.FN)

⁴⁶ munin ni eymekkar : 魔物を退治する時によくとられるやり方である。eymekkar は「～を～におすそわけする」。白沢氏の説明では「たのんでいたものやっところ、いま、見つけたから、ほら食べれ食べれっていうようにして、分けてやったて」(N8808312.FN) ということである。山の中で倒れて腐ってしまった木は、カムイの世界へ戻ることもできず、供物を捧げてくれるものもなくて飢えている。だから、何か捧げてくれと人間に「たのんで」いるのである。そういうものに魔物の肉を供物として与えることで、魔物の魂をその腐れ木のカムイに押さえさせてしまうのだと考えられる。

⁴⁷ 山で変死を遂げた人に対する、このような葬儀の仕方については、CES3号(2000)に掲載した、「狼から逃れた娘」で触れているので、参照していただきたい。

sekor hawas wa orowa ekimne orowano
na ape a=ari usi imakake un a=ani hine a=anu
wa orowa, ca tuypa rok ca tuypa rok poronno
ca tuypa hine, kasi o rok o rok wa orowa,
munin samamni anpa wa arki wa kasi o.

"kim ta uosura anakne tanpe neno an pe ne
na."

sekor hawas kor ki ruwe ene an hi ne h_inē,
orowa sap=an ruwe ene an h_i ne korka, cise
or_ ta an=an ka ruska kusu, orowano
a=unuhu patek a=hoppa hine orowano hunak
un hoyupu=an a hoyupu=an a.

"nenō e=an yakka nep rakaha oma ruwe ka
isam."

sekor yaynu=an kusu

"neun ka e=arpa wa e=ray wa ne yakne
e=yaykotomka."

sekor yaynu=an.

kamuy a=ne wa orowa aynu a=onaha
arkamuyasi or wa rayke ... a=rayke ...
a=raykere⁴⁸ wa isam w_a orowa okake ta
an=an ka ruska kusu orano hoyupu=an w_a
hunak un ka arpa=an a arpa=an a ayne,

という話であり、(さらに)山の奥に入
って、火を焚いたところよりさらに向
こうに(遺体を)持って行って置いて、
枝を切って切って、枝をたくさん切って
きて、その上にたくさん積み重ねて、さ
らに腐った倒木を持って来てその上に置
いた。

「山での葬儀というのは、このようにす
るのだ」

と言いながら、そのようにして、それ
から山を下りてきたが、家にいるのも腹
立たしいので、母さんひとりを残して、
どこへともなく走り続けた。

「このまま生きていても、何の甲斐があ
るものか」

と思ったので

「どこかへ行って死んでしまった方が、
自分にふさわしい」

と私は思った。

私はカムイであるのに、人間の父さん
を悪い化け物に殺されてしまって、その
後に生きているのも腹立たしいので、走
って、どこへとも知れず向かっていっ
た。そして

⁴⁸ arkamuyasi or wa rayke と言ってから、a=rayke、a=raykere と言い直している。NP₁ or wa a=V₁ 「NP₁ に V₁ された」という構文では、V₁ には単純な他動詞がくればよいので、この場合 rayke で十分なはずである。わざわざ raykere というその使役形を使っている理由はさだかではないが、「私のせいで殺させてしまった」というような意味合いを出そうとしたということも考えられる。

tane iperusuy ka =an sinki ka =an⁴⁹ kor
hoyupu=an ayne, atuy sam ta san=an w_a
kusu, <su> atuy or un terke=an hine orowano
ma=an w_a arpa=an ayne <ne> tane anakne
sinki kaspā a=ki ruwe ne kor atuyesatsaci⁵⁰
a=ekaranke wa kusu <su>, atuyesatsaci ta
yan=an hi patek yan=an hi patek pirka takar_
ne a=ueomante. <te>

ray=an humi ne kuni a=ramu kor oro ta
atuyesatsaci ta ray=an humi ne kuni a=ramu
kor_ ray horkew a=ne ruwe ne a kusu,
a=eysoytak hawe ne na. sekor kane horkew
kamuy isoytak⁵¹.

sekor ne awa.

もはや腹も減り、疲れもしながら走り
続けたすえに、海岸に出たので、海の中
に飛び込んで泳いで行くうちに、もはや
疲れ果ててきた。すると、浅瀬が近付い
て来たので、その浅瀬に上がったところ
までが、良い夢のように頭の中を行き交
った。

自分は死ぬのだなと思いながら、その
海の浅瀬で死んで行くのだと思いながら
息絶えたオオカミであったので、その話
をするのだと、オオカミの神が物語っ
た。

ということだ。

(なかがわ ひろし・千葉大学教授)

⁴⁹ iperusuy ka =an sinki ka =an : この an は人称接辞の an と見るしかないと思うが、さりとて、副助詞の ka が動詞の内部に抱合されていると見るのも難しい。むしろ、同じ人称接辞でも接頭辞の a=などに比べて、=an が自立性のより高いものであることを示す一例と見た方がよいだろう。

⁵⁰ atuyesatsaci : atuy 「海」 e- 「～<場所>で」 satsat 「乾く」 hi 「ところ」。白沢氏の説明では、ここは砂浜ではなくまだ海の中である。したがって潮が引くと水が無くなって砂地が出るあたりと考えればよさそうである。

⁵¹ このように、誰も聞く者の無いようなところで叙述者が死んでいくという終わり方は、基本的には神謡によく見られるスタイルである。たとえば、知里幸恵『アイヌ神謡集』第3話「狐が自ら歌った謡 ハイクンテレケ ハイコシテムトリ」、第5話「谷地の魔神が自ら歌った謡 ハリツ クンナ」、第9話「蛙が自らを謡った歌 トーロロ ハンロク ハンロク！」など、みなこの類である（ただし、これらはすべて善神ではないが）。しかも、この話の最終的な叙述者がカムイであることを考えあわせると、この話がもともと神謡であった可能性も高いと思われる。